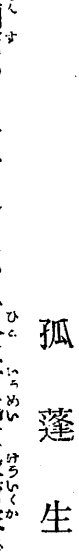

如何に口をきくべきか

孤蓬生

佛蘭西のフエネロンといふ人は有名な教育家であるが、其の著女子教育論を見ると、女子教育に於ては先づ其の特有の缺點をあげて之を直さなければならぬといつていろ〳〵な缺點をあげてゐるが其中に婦人の冗辯も數へられてゐる、そして彼は之は最も忌むべきものであつて子供の時から之を矯めねばならぬ。それに世の人達は子供に無暗に喋らせて、妙にひどく喋るのを見て面白がつてゐる、之は非常な間違だと叱つてゐる、余は女子の多辯なる事には絶對的悲觀はしない。世皆善からざるものなしで、やつぱりそこには善い所もある。必要(實用的に)である場合の外は詰らぬとしたならば人は如何に殺風景であらうか。物は實用といふ外に裝飾とか趣味とかいふ方面があるのだから言葉だつてさう日がな一日用事の事ばかり、四角四面な事ばかりではまだ其職能を盡したとはいへない。要は『程』である、中庸を得るにあるのだ。全体男と女とは餘程頭の働き方が違ふのでそれが又言葉になつて現はれるのだから、女の連想の方角と男の連想の方角とが一致しない爲に男から見ると女はつまらぬ事をくど〳〵喋つてゐるやに思はれる事がある。つまり女は感情的に聯想するから比較的理性的に働く男子の聯想とは一致しない(勿論其の女子の感情的なるが爲に之につりこまる〻事もあるが)。ゴルドン將軍のパレスタイン感想錄に『舌は長辯にして蛇の如し、而して女子が遺憾なく之を表はし而かも人之を怪しまざるは不思議なる事なり』と、女はさきに食ひたるに其舌が女子の特別の長所たるは不思議なり』と、女がさきに食ひたるにとは西洋の傳說のアダム(男)イーヴ(女)といふ世界の初の先祖がもつたが其イーヴの

方が神から禁ぜられた樹の實をさきに食つたので人間は遂に罪を犯す樣になつたといふ事があるからである。けれども自然は公平であつて男を強く作つた代りに女の方は舌を長く作つたのである。婦人諸君は此の天與の賜を害用せずして利用する義務がなければなりますまい。

で女子が常に其家族なり友達なりお客になりとよく氣の利いた、快活な話をする事の出來る才能を養ふといふ事は最も大切である。快活に上手に話をする婦人の側にゐるとこういつでも春の日の暖かい日光がさつと當つてゐる樣な心持がするものである。人はよく無口の者は實があるといふが、之は實があるといふ事を褒める言葉であつて、無口といふ事を褒めるのではない、實もあり話も上手、即ち心も八丁口も八丁の方がいゝのである、只、口が十丁にもなるといけないのである。或蓮葉な婦人があのヲセラスを書いた有名な文人ジョンソンの所へ來て『殿方とよりは女とお話しなさるのがお好でせう』といへば、博士は『はい、いかにも、私は御婦人の美しい事、優しい事、それから沈默でいらつしやるのがすきです』と答へたさうですが之は只婦人が心にもなき事を又は悲かなる事をペチャクチャ喋るを當てこすつたものでせう口先ばかりが甘いといふ人は當にならぬものである、所謂『淺き瀨にこそわだ波はたて』で、饂飩でも水がいつぱい入つてゐるときよりは少ししか入つてゐない時の方がバチャバチャ鳴るものである言葉にも此眞實に實のある誠の罩つたのがほしい淺いのはゆかしくない。美しい心、善い心、高い品性があれば其人のいふ話も亦之に從ふもので喩へば鉛やブリキの音よりも銀の音が涼しく心ゆくものであるが如くである。由來我國では儒教の主義として昔から所謂沈默寡言を貴んで來た所から自然の與へた此話の能力を發達する事の出來なかつたのは頗る遺憾である。今日は文明の教育で女子などはよく話す事を奬勵されてある樣であるが

まだ〳〵足らない。女學生諸君は面白相によく喋るが一般に淺い、低い。いはゞ品がない。之は修養が足りないからだ。訪問のお客には物質的の御馳走よりも座談對話の甘い方がどれ程御馳走だか知れない。

對話の精神は同情である。話をするには自分がそれによつて快を感ずるといふためでなく、其聽者を喜ばす爲でなければならぬ、之には相手の氣合をよく呑み込んで話の題目をみつけねばならぬ。人によると自分の事や自分の子供の事や自家の下女の事や、つまらぬ事を口から出まかせに、其座に合ふまいが合はふが一切お拘ひなしで喋る人があるが之はいけない。かういふ癖の人は寧ろ氣の毒である彼の有名な英雄傳を書いたプルタークが曰ふた事に『人の缺點過失には嗤ふべきものあり忌むべきものあり又危險なるものあり、而して冗辯は此三者を具有す』といふ語がある、謹まなければならない、詩人のコンリッヂは切りなしに話す人であつたが人はみなその切りなしにいつまでも話すのを聽きたがつたといふ事である。出來るならかういふ風にありたい。

話には時と場合を見なければならない。何も言ふてはならぬ時もあれば、何か言はなければならぬ時もあるけれども、何んでもかでも有つたけさらけ出して話さなければならぬといふ時はない。何でもかでもいつてしまふ人は愚である。かういふ人は舌を使ふのでなくて舌に使はれてゐる人である。舌の奴隷になる人は時にあられもなき事をいひ出す。ポープが『言葉は葉の如し。其の多きに過ぐる所には實少なし』と或詩の中に歌ふた事がある。又或人は屏風の後で速記者が自分の話を寫し取つて明日の新聞に出さんとしてゐるのだと思つて話をするがいゝと誡めたさうである。

人が集るとよく他人の噂をするものである。只の噂はいゝがぢきそれが惡評になる。人間の弱點特に女子の弱点でどうも人の短所が目につく、でそ

れがぢきに口に出るといふ風である。之は最も注意すべきである。自分がこの惡習に陷らぬようにすると共に人がそれをするのもいやになるやうにならなければならぬ。人によると他人の惡聲をきいて喜ぶ者がある甚だしきは根ほり葉ほり人の惡い事を聞きたがる者がある。之は其人の品性の劣等なのを自ら廣告してゐる者である。他所の家から肉をくはへて來る犬は自分の家からもくはへて行く犬だといふ諺があるが、人もやつぱりさうだ。それも實際の事ならまだしも、或事實に自分の邪推を附け加へて他人を惡くいふ者がある、之は自分がぬぢけた性質の證據である。ある婦人が近所の婦人が柄の太い箒を買つて行くのを見て、あの人は亭主を叩くのださうだといつたさうであるがさういつた人こそ亭主でも叩く人に違ない。あんまり出鱈目に喋つてゐると嘘も眞も一所になつてしまふ。或る佛蘭西の一貴婦人が來客を受けた時、畫室に案内して先祖以來の家族の肖像を見せて居つたが、其の中の一つを指して客に向ひ、『そこに軍服を着けた士官が居りますでせう。あれは私のお祖父さんのお祖父さんに當りますんでまー勇ましいつたらまるで獅子の樣でございましたが、まことに運の惡い人でして——。戰爭をすればいつでも一本ゴヽ手や足を失ひますんで、』とそこまでは流暢でよかつたが、『廿四度も戰爭をしました』といつてしまつたさうです。これでは折角の御自慢も水の泡、あはれ英雄も廿四本の手足を持つた片輪にされてしまつたのである。言葉といふものは仕末が惡い一度口から出したらもう駟馬も及ばずで取りかへしがつかない。西洋にかういふ話がある。フィリップ、ネリ（十六世紀頃の人、高僧なり）の所へ一婦人が尋ねて來て、私は誠に人のわるい事をいふ惡い癖があつて困ります、どうか直して下さい、といふて來た。するとネリはお前の罪は大きいが併し神の御慈悲は又大きいから、心配には及ばぬ。只私のいふ事をお聞きなさ

い先づ町へ行つて殺したてのまだ羽のある鷄を買つて來て、それをどこか少し離れた所へ行つて、歩きながら羽をむしつて來て下さい、むしつてしまつたら直ぐ歸つてお出でなさい』と命じた。婦人は此の妙な命令通りにやつてからどんな教を下さる事だらうといそ〳〵と歸つて來ると高僧は更に『よく忠實にやつて來ましたな。さあもう一つやつて下さい。之が出來るとすぐに貴女の癖も直ります』といつてさて此度はもと行つた通りの道を行つて先刻むしつた羽をみんな拾つて來いと命じた。すると婦人は困つて。『私はみんなうつかりむしつては捨てゝしまいましたので、風がみんな吹き飛ばしてしまひました』と答へた。そこでネリはお前の之までの罪もみな其通りだ、もうとり返へしはつかない。只之から注意して再びしないやうにしなさいと誡めたさうです。之は家庭に於て最も注意すべき事で、子供の前などで此の惡習慣の例を示してはならぬ。多くの中流以上の家庭でも之が行はれてゐるかどうか怪しい、話す事が上手になると共に、婦人はまたよく聽く習慣をつけねばならぬ。會などでよく見うける事だが聽いて居るべき時にこそ〳〵話をしてゐるのはよくない。ある佛蘭西の貴族が若い者に注意を與へて、美しい女と結婚するのもいゝ、金持の娘と夫婦になるのもいゝが、何れの場合に於ても、よく傾聽する婦人を娶れ』といつた事がある。オセロの話を御存じの方は御承知でせうが、彼のデズデモナがオセロの愛を得たのはよく傾聽する事が出來たからであつた。

婦人によると子供や下女をやたらに叱り飛ばし始終小言ばかり言つてゐる人があるが之は注意すべき事だ。子供を善き性質に育て、親に同情あるものとなり、秘密なく何事も母親に打ち明けるといふ風にし下女は從順に喜んで働くといふ爲には、さうやたらに叱つてばかりいてはだめである。惡い事を多く指摘するよりは善き事を示す方がいゝのである